

## 沖縄県におけるサイレージ用トウモロコシの栽培実態

・徳永初彦・福地 稔・大城真栄・前川 勇・伊佐真太郎・庄子一成 (九州農業試験場・沖縄県畜産試験場)

Hatsuhiko TOKUNAGA, Minoru FUKUCHI, Shinei OSHIRO, Isamu MAEKAWA, Shintaro ISA and Kazunari SHOUJI; TOKUNAGA, H., M. FUKUCHI, S. OSHIRO, I. MAEKAWA, S. ISA and K. SHOUJI : A Survey on the Actual Cultivation of Silage Corn by Farms in Okinawa Prefecture

沖縄県では1977年以降自給飼料生産総合振興対策の補助事業により、各所にサイロが整備されたのを契機に良質草種への切り替え希望が生じ、本土で奨励・普及され作付面積が急増しているサイレージ用トウモロコシが注目された。このことから、1978年度全く作付がなかったそれが1980年から増加し、定着の兆がみえた。しかし、1981年には急減し現在に至っている。本研究はかかる事情を背景に栽培の実態を調査して増減要因を明らかにし、今後の作付面積の拡大策と栽培技術改善を図るための資料とした。

### 1. 調査方法

#### 1) 調査場所

沖縄本島(伊江島・久米島・伊是名島を含む)、先島(石垣島・宮古島)。

#### 2) 調査実施期間

1982年10月12日～26日、1983年3月5日～19日。

#### 3) 開取り調査農家

代表的畜産農家13戸(酪農6戸、肉用牛7戸)を選定し、1979、'80、'81、'82年度いずれかの年次にサイレージ用トウモロコシを栽培した農家5戸から、導入の動機と栽培状況、未栽培農家からは、サイレージ用トウモロコシに対する意識調査を行った。

### 2. 調査結果の概要

#### 1) 作付状況

サイレージ用トウモロコシの栽培は、1978年以降各地に整備されたサイロへの詰込み材料とネピアグラスにまさる高栄養飼料を生産することを目的として始まった。作付面積は1979年度から増加し、1980年度に急増して14haに及んだが、1981年度には2haまで減少した。地域別には乳用牛、肉用牛の飼養頭数の多い本島南部・中部地域に多いが、ネピアグラス、ローズグラス等の永年草に比較するときわめて少ない。

農家は試作が主である。(2)栽培時期：気温(日平均気温15℃以上)に制限されず周年栽培している。耕地を高度に利用すれば4期作が可能であるが、3～4月に播種してヨトムシの食害、7月に播種して台風害を受け作柄が不安定となっている。安定して収量をえるには台風来襲が全くない、病害虫発生が少ない12月～3月の期間に栽培することが好ましい(安定作期)。(3)栽培品種：早～中生系品種が栽培されている。今後、安定作期を中心に栽培面積が増加すれば、低温・短日条件下でも正常に生育する品種が要求されるので、これら品種の選定が急務である。(4)播種方法：小面積栽培農家は条播または散播の手播き、大面積栽培農家はコーンプランタによる播種であるが、機械播種では土壌の特殊性(乾燥するといちじるしく硬くなる)から覆土が十分行われず、結局人力で行い、多大の労力を費やしている。したがって機械の改善が要求される。(5)発芽・初期生育の安定：播種直後液状きゅう肥を全面散布して発芽を促し、さらに発芽後化学肥料を追肥し初期生育の安定を図っている。(6)刈取り：強風により黄熟期まで秆が直立していることが少なく、コーンハーベスタによる刈取り作業が困難である。そのため、ある農家は手刈作業でサイロ詰めを行い、多労でトウモロコシ栽培を断念した例もある。

### 3. 今後の課題

以上、沖縄県におけるサイレージ用トウモロコシの栽培状況、被害発生状況、機械使用等についてのべ、栽培の困難性を指摘した。しかし、栽培農家、未栽培農家いずれもサイレージ用トウモロコシの栄養価を高く評価し、とくに酪農家は夏季の乳量低下防止飼料として強く導入を希望している。したがって、今後、漸次試験研究機関の研究により、安定作期と作期別適品種、一年生産作物との組合せ付体系による作付面積の拡大、小・中型作業機械による播種から刈取り収穫までの一貫作業体系が確立すれば、自ず

第1表 飼料作物の作付状況(中・南部地域, S56, 10現在, 対象212戸, 1戸当たり23頭)

項目	草種	ネピアグラス	さとうきび	ローズグラス	バラグラス	コーン	ソルゴー	計	備 考
面積 (ha)		233	44	13	6	1.6	0.3	298	
割合 (%)		78	15	4	2	0.5	—	100	
収量 (生草t)		58,250	484	1,950	780	112	36	61,612	さとうきびは
10a当たり生産量 (kg)		25	1.1	15	13	7	12	—	トップのみ

#### 2) 栽培状況と問題点

農家から開取った栽培の現状は次のとおりである。(1)農家の栽培面積：1戸当たりは27～450aで戸別差がいちじるしい。大面積栽培農家はサイロ詰め素材生産、小面積栽培

から栽培面積が増大するものと考えられ、将来が期待される。